

【主題】主体的・対話的で深い学びの授業づくり

【副題】— 子どもの つぶやき たからもの —

【学校・団体名】奈良県奈良市立二名小学校

【役職名・氏名】校長 辻本 浩

1 研究主題の設定の理由

本校は奈良県の北西部に位置する。「大淵池公園」や「杵築神社」などが校区内にあり、地域教材も様々にある。地域の方々も学校運営や教育活動に意欲的に参加していただき、地域の方々との繋がり深い。地域の「人・もの・こと」と実際に関わり、触れながら、個の学びと協働の学びを充実させる価値について見直し、実践を深めていくことを目的とした。これらより、生活科・総合的な学習の時間を研究領域として取り組んだ。

主体的・対話的で深い学びの授業づくりの根本には、目の前にいる「子どもの事実の見取り」を徹底しなければならない。子どもに寄り添い、目の前の子どもが何に興味関心を持っており、何に気づき、何を思っているのか、子どものそばで教員も共に学びながら活動することで、主体的・対話的で深い学びの授業づくりに近づくことができると考える。そのためには、ノートや発言、会話などから子どもたちの様々な呟きをいかに教員が拾い、それぞれの呟きを繋ぐための構造的な板書が必要になってくる。「子どもが自分から学びに向かうって?」「子どもが本気になる授業って?」「深い学び、探究的な学びって?」「教員による子どもの見取りって?」「先生自身が楽しい授業を?」「授業力を上げるために?」などの教員からの疑問も議論し合いながら研究を進められるように設定した。

2 研究の手立て

- 教職員全員が同じ方向を向けるような取組
- 発達段階に応じた系統的な授業づくりの構築
- 子どもが自分事として取り組む課題設定
- 地域の「人・もの・こと」と関わる取組

3 研究の在り方

- 6学年の研究授業並びに研究協議及び研究協議後のアンケートの実施
- 月2回程度のOJT研修
- 月に3～4回程度の自主研修会

理論的な研修で、今求められる教育観や授業観の改革、教員の困りごとの相談、一人で教材研究をするのではなく、多くの先生方とさまざまな視点で教材研究を進めた。

4 各学年の実践や具体的な取組

○第1学年『にこにこ大きくせん

～家族の笑顔ふやし隊～

家庭生活について調べる活動を通して、家族の役割や自分でできることについて考え、家族は互いに支えあっていることに気づき、自分の役割を果たす中で、家族の一員である自分の存在への気づきを深める活動を行った。

はじめに、毎日の生活を振り返り自分や家族がいつ笑顔になっているか探し、笑顔のアイコンを書き足した。家族の笑顔に注目し、「家族がどんな時に笑顔になっているのか」「もっと家族の笑顔を増やすにはどうしたらいいか」を考えた。家族にたくさんのことをしてもらっていることに気づいた。

次に、家族に「えがおのたね」をインタビューした。笑顔の増やし方は、家族の仕事を手伝うことだけでなく自分自身のことを頑張ることで成長することなど、色々とあることに気づくことができた。

そして、家族の笑顔を増やす「にこにこ大きくせん」を立て、2週間続けて挑戦した。家族の笑顔を増やしていく中で、自己有用感を高め「もっとやってみよう」と難しいことにも挑戦したり、家族の一員である自分の存在への気づきを深めたりすることができた。さらに家族の一員としてよりよい生活をしようとする意欲や態度の育成に繋げていった。

主体的に取り組むための工夫については以下の3点を意識した。

- ①笑顔が増えたことが視覚でわかるよう、笑顔のマークなどを使って喜んでもらったときに随時記録した。
- ②毎日した作戦を笑顔の種類ごと（ピンク：ありがとう、水色：すごいね、黄緑：なかよし）に分けて模造紙に貼った。分類することで家族の笑顔について気づきを深めた。
- ③単元の学びの流れが見てわかるよう、後ろの掲示板を使って、活動や子どもの気づきをまとめていった。挑戦が終わっても、この学習を継続させることができた。



○第2学年 『公園マスターになろう』

「二名公園ちょうさい」をテーマに自分たちが住んでいる地域にある公園で遊びを通して何度も調査することで、身の回りにはみんなで使うものがあることやそれらを支えている人々がいることなどが分かるとともに、それらを大切にし、安全に気をつけて正しく利用することができる力を育成するために実践を行った。

二名公民館と南公園に町探検に行き、自分が発見したことを友達と伝え合い更に詳しく町のことを知るために、誰もが一度は行ったことのある公園を調べる教材にすることにした。まずは公園調査を行った。公園にある遊具やおすすめポイント、△ポイント、来ている年齢層などそれぞれの子どもが知りたいと考えたことを中心に調査を行った。さらに深く調べるため、学級全員で学校近くの公園を調査した。

南公園調査は全部で4回行った。調査を進めるごとに「みんなのための公園」である事に気がつき、「みんな」が使いやすいように多くの工夫がされていることに気がついた。また、地域の人に協力してもらい南公園にある防災倉庫と学校にある防災倉庫、みんなに気を付けてほしいことなどを教えて頂いた。公園は「遊ぶ場所」であり「避難の場所」でもあることを認識した。

みんなが利用する公園なので自分達目線で利用しやすい公園を考えるのではなく様々な立場から考えられるよう教師や家族など様々な年代の方にインタビューを行った。最後には今までの学習の中で自分たちは多くの人に支えられていることに気がつき、公園のために自分たちにもできることがあり、公園のために実行できることを宣言した。



地域の人から様々なことを教えていただくことを通して、

自分たちが地域の人などの多くの人に支えられていることに気づき、公共施設はみんなで利用するため、規則を守ることや利用する人がお互いを思いやることの大切さを学ぶことができたと思う。

○第3学年 『二名の果てまでイッテQ』

「二名の果てまでイッテQ～秋祭り編～」をテーマに、二名地域の「祭り」を題材に実践を行った。

2学期のはじめ、「夏休みの共有会」から「祭り」に注目し、自分たちの地域にはどんなお祭りがあるのかを調べることにした。調べ学習から「杵築神社ではたくさんお祭りがあるの

はどうして？」という疑問が生まれ、「実際に行って確認しよう」という、子どもの疑問や意見から授業を展開していった。

実際に杵築神社の氏子さんに、杵築神社の魅力や歴史などのお話を聞きにいったと同時に「秋祭りに参加する人が減ってきている」という課題を知ることになる。このまま減り続けてしまうとお祭りができなくなってしまうということを実感し、自分たちに何ができるのかを考えていった。そのために、まずは、杵築神社の秋祭りに参加することになった。今年4年ぶりに行われた秋祭りに、3年生の約8割の子どもが参加し、杵築神社の秋祭りの良さや魅力について共有し合った。このまま、地域の人や子どもたちが参加しなくなっていくと、楽しかったお祭りに参加できなくなってしまうと考え、杵築神社の秋祭りを続けていくために「秋祭りにみんなに参加してもらおう」という最終ゴールを全体で決めた。

「秋祭りに参加してもらうために、お祭りの楽しさを知ってもらおう」意見から、「冬祭りをしてお祭りの楽しさを伝えよう」ということになった。自分たちが体験した事をもとに、お祭りの計画を立て、「お神輿を作ってみんなで担いで学校を回る」「屋台をして楽しんでもらおう」、「自分たちの祭りによって、杵築神社の秋祭りに参加しようと思ったかどうかを知るためにアンケートをとる」という意見も出た。アンケートの結果は、参加した107人中2人は「いいえ」と答えた。その事実から子どもたちは、もっと杵築神社の事を知ってもらう必要があったという反省もあった。

お祭りを2日間実施した結果、「笑顔が見れて嬉しかった」「大変だったけど、みんなも楽しそうだったし、自分たちも楽しかった」という意見が出た。この単元のふりかえりを行ったとき、「最初はお祭りは地域の人や神様を笑顔にするためだと思っていたけど、自分たちがお祭りをして、参加してくれた人の笑顔が見られて自分たちも笑顔になった。だからお祭りを続けているのは、大変だけど地域の人達のたくさんの笑顔が見られてうれしいし、自分たちも楽しいから続けているということに気づいた。」と、参加する側と企画する側、両方の立場になって考えることができ、はじめには気づくことができなかったことを、自分たちでお祭りをするという体験を通して、新たな気づきがあり、学びを深めることができたと感じた。



○第4学年『#鹿しか勝たん』

人・環境・鹿との繋がりを調査する活動を通して、「奈良のシカ」と人とが共生するための課題に気づき、それらの問題を解決するために最も効果的な方法を考えたり伝え合ったりするとともに、シカと人との共生するために自分たちでできることを取り組んだ。

第一部では、学級で「平日の観光客は90%が外国人らしい」という子どもの日常会話から他の子どもも意見を出し始めたことによって、この材を進めようという話になった。元から知っている情報や夏休みに奈良公園に行ってわかったことや、疑問を学級で出し合い、大きく、観光客、シカ、奈良公園の環境に興味があることがわかり、始めは、インターネットや本を使い学習を進めた。その際も、事実や具体的な数値等にこだわり、根拠をもって情報収集をすることを意識させた。その中で、「鹿の角切り」の伝統行事を見学しにいった子ども2名からの情報共有をすると、インターネットではなく、現地でしかわからないことがたくさんあることを知り、社会見学で「鹿苑」では、鹿を保護する活動をする人の話を聞いたり、観光客の人にインタビューを行ったりした。

第二部では、これまでの学習から分かったたくさんある大切なことを個別、そして学級で意見を出し合い、「自分が一番大切なこと」を決めた。意見を教師に発表するだけではなく、友達の見解と自分の意見を比べて考えたり、付け加えて発言したりすることを意識させた。それを大切にするために、誰にどう行動してほしいのか、どんな方法で行うと伝わるのか、そして、行動したあとに、自分たちの行動について鹿苑や観光案内所の方たちに評価をもらった。単元を通して、子どもの発言から構造的に板書をまとめ、子どもがそれを見ながら、自分の考えを練ったり、つながりを見つけ発言したり、ふりかえりで書くことができるようにした。興味を持って取り組んできたからこそ、大切にしたいことを全員が持っていて、自信を持って発言することができた。そのためにも、子どもの実態に合った、材を探すことが大切である。今回は、鹿を材にしたことで、答えのないテーマで話し合ったり、考えを深めたり、実際に足を運んだりする中で、興味・関心を持たせることができた。



○第5学年『トレドの森』

インターネットでの情報が少ない中、正しい情報を集めトレドの森について知り、地域の伝

統・文化を守り人を集めるために課題解決する力を身に付けさせたいと考え実践を行った。

トレドの森とは、地域の公民館の隣にある公園である。そこは、奈良市とスペインにあるトレド市が姉妹都市を結んだ石碑が建てられている。また、2022年に50周年を迎えコンサートが開催された。そのような歴史的公園があるが知名度は低く、ほとんどの子どもたちは場所や名前を知らなかった。

教材の出会い、校区を探検する中で子どもたちが気になったものを共有した。その中で「トレドの森」が挙げられ、それについて進めていくことになった。まず、子どもたちは、教材について調べ深めていく学習からはじまった。しかし、インターネットで調べてもあまり情報がでてこない現実を突きつけられた。授業の時間だけでなく放課後や休みの日でも子どもたちが主体的にトレドの森に足を運んだり隣にある公民館の館長さんに話を聞いたり、アンケートをとることでそれぞれが集めてきた情報を全体で共有することで深めることができた。

これまでの学習からそれぞれがどんなトレドの森にしたいのかをもう一度考え、学級全体で共有をした。「きれいな場所じゃないと行きたいと思わない」「遊べるような場所にするといい」「まずは知ってもらいたい」と子どもたちが話し合いをすすめていった。子どもたちそれぞれの思いや考え、やりたいことが異なるため、4つの課題にわかれて活動をした。

①きれいでは、公園の掃除や環境整備を教員の引率のもと授業の時間で行った。中には、放課後や休みの日にしている子どももいた。②インパクトでは、トレドの森に興味をもってもらえるような取り組みを考え、③知ってもらうでは、トレドの森をまずは知ってもらうことが大切だと考え、ポスターやちらし、回覧板などを作成した。また、他の小学校との交流で伝えることもできた。④魅力では、トレドの森にあるもともとの魅力を引き立たせるだけでなく新たに魅力を作り出していくことになった。限られた授業の時間でそれぞれが活動を進めていくなかで出てきた新たな課題や困ったことを全体で共有し解決できる時間も取り入れた。それぞれ4つのグループで活動をすすめているが学級のみんなで解決することで子どもたちが自分事として考えるきっかけにもなった。



○第6学年『つくろう笑顔溢れる大湊池公園』

単元目標を「近隣の公園の有用性や課題につ

いて調査する活動を通して、公園が地域の人々や行政の尽力により成り立っていることを理解し、さらに笑顔あふれる公園にするために自分たちにできることを考えるとともに、今後の地域との関わりに生かすことができるようする。」として、実践を進めた。

始めに、大淵池公園について知っていることや感じていることをまとめさせた。まとめたものを共有することで、「やっぱり大きい公園が近くにあるっていいな。」などという声が挙がった一方、「このままで良いのかな。」「あかんところも結構ある。」という声も聞こえてきた。「自分たちに何かできることってあるのかな。」と考える子もいた。

現状を把握するため大淵池公園でフィールドワークを行った。公園の地図を用意し、気づいたことや、生えている植物、危険箇所、遊具、おすすめスポット、ベンチなどを書き込んだ。自分だけでなく、様々な人の立場で考え、あらゆる角度から公園の良い点や改善点を発見するように指導した。この日に自分が見たものが全てと思わずに、時間帯や季節が違ったらどうなるかなど、想像力を働かせて活動する様子が見られた。見る、触るなど、様々な感覚を使って気づきを集め、そのことについてざっくばらんに会話しながら取り組んでいた。



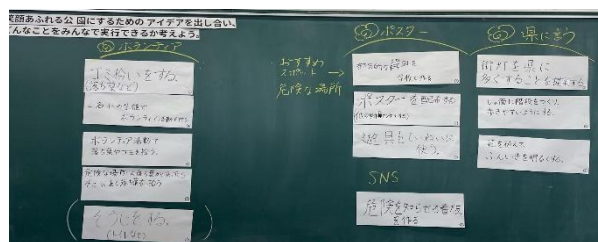
フィールドワークの後は、調査したことをクラス内で共有した。大淵池公園の良い点や改善点を書いた付箋を、クラスで一つの地図に貼ることで全員の気づきを視覚的に分かりやすくした。自然が豊かで良いと考える子がいる一方、木が茂っていて暗いと考える子もいて、考え方は人や立場によって様々だという気づきに至っていた。

事前に個人で用意しておいた公園の改善案をグループで共有した。共有した中で、特に良いと思った数個は、短冊に書かせた。短冊は、分類がしやすいという点で、見やすい板書にするために非常に効果的であった。この活動で、見つけた改善点は大きく分けて、行政にお願いしなければならないことと自分たちで行動に移せることに分類できることに気付く子どももいた。

自分たちに出来る限りのことを実行しようと学級で話し合った。その結果、本学級では、大淵池公園の危険箇所、遊具、おすすめスポットなどを書き込んだ地図を学級で一枚作り、全校に配布することになった。

本単元では、身近な大淵池公園を題材にすることにより、自分事としてテーマを捉えながら授業に取り組む子どもたちの姿が多く見られた。地域の公園について、知っているようで知らないこともたくさんあることを知り、それを自分たちで明らかにしていくことを楽しんでいる様子だった。

今回の学習が、今後の生活の中で分からないことが出てきたときに、自分から探究心をもって調べるといった行動につながっていくことを願っている。



〇OJT 研修

若手教員が全体研修で学んだ理論等を実践に生かすことができるような「つなぐ OJT」の形を目指した。理論的な話から各教科等の見方・考え方についてや、研究授業に向けて悩んでいることなどを職員で考えられる機会にした。また、教員からの「主体的・対話的で深い学び」の構築に向けた疑問も議論し合う機会とした。

〇自主研修会

本研修は、2年目の教員の呼びかけで始まった。これまでの OJT 研修等で、教材研究を一人で行っていたのは視野が狭くなるという話をすすめてきた。そこで、幅広く視点を持ち、様々な教員の眼から子どもの事実を見取り共有し合うことで、教材研究の深まりを目指した。多様な視点で教材研究をすすめることによって、子どもたちの学びをより充実させられる準備をできる会となった。

5 成果と課題

〇成果

身近な材を教材化することで、子ども自身が問いや疑問をもち、子どもの問いや疑問から学びを構築することができた。これは、子どもが自分事として課題を捉え、本気で課題解決に向けて学習に取り組んだ結果であろう。また、子どもの事実を見取ること、その都度、必要なタイミングで教員が出たり、思考を促したりすることのできるような板書を考えていく術を見つけていくことが可能となった。

〇課題

子どもの事実の見取りのために、「ふりかえり」を教員が読むことは時間がかかる。また、授業中のつぶやきを瞬時に判断し、ファシリテーターとして拾う難しさも大きい。しかしながら、個の学びを充実させ、協働的な学びへと繋げるためには教員にとって絶対に欠かすことのできない時間であると考え。子どもの思考を促すことのできるような朱書きの入れ方とその時間が確保できる工夫を試行錯誤する重要性について考えていくことが求められる。